

生きる力を育む創作民話絵本づくりの指導実践

黒柳 諭

The practical guidance of making a picture book of creative folk story that cultivates the power of living

Satoshi Kuroyanagi

キーワード：国語科 Japanese Language Studies, 総合的な学習の時間 Integrated Studies, 特別活動 Special Activities, 社会科 Social Studies, 美術科 Art Studies

1 はじめに

小学校学習指導要領は改訂され平成23年度から全面実施となる。

改訂の基本方針として、①生きる力を育成すること、②知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力などの育成とバランスを重視、③豊かな心や健やかな体の育成をあげている。

教育課程の編成の一般の方針は(3)生きる力を育む各学校の特色ある教育活動の展開を示している。「生きる力」とは、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人を思いやる心や感動する個々となど豊かな人間性、(略)と記載されている。

筆者はこのことを受けて、テーマを「生きる力を育む創作民話絵本づくり」と設定し、過去に行った複式学級小学校5・6年を対象とした実践事例研究を検証し報告する。

2 目的

過去の勤務校の教育目標は、「たくましい生きる烏川っ子」をめざして、教育活動の中で具現に努めてきた。この「たくましく生きる」は、子どもの内に込められる「自分の生き方への願い」によって支えられる。子どもの生活そのものをよりきたえ、育てていくことが「生き方への願い」を明らかにしていくことである。

筆者は、子どもの生活をきたえ、育てるために、子どもの認識や感性の働きに着目し、より豊かなものにしていくことが大切であると考え

る。子どもが生活現実に直面したとき、そこから生まれる素朴な生活感動が、表現を誘発させる。表現の中に、生活を見つめる目や、生活を感じる心が表し出されてくる。このような、自己表現の道筋にはたらく子どもの認識や感性のありようを問い直しながら、子どもは自分自身の「生きる力を育む」とおさえている。

(1) 生活に根ざす生きる力の表現

子どもの自己表現の母胎は自身の生活である。子どもは、自分の体験に立って自己を表出する。表出において、直接的になされるものが、子ども自身のことばであろう。ことばの中にこれまでの成長過程や生活経験の中で養われてきたその子に個有なものの見方、考え方、感じ方が表し出される。ことばの中に、その子らしい生活がとらえられるゆえんがある。

筆者は子どもの「生きる」過程にはたらく「ことば」ととらえていくこと重視した。子どもの言語的表現を核としながら、自らの生活をおし進めていく子どもの姿を見続けることとした。

(2) 「創作民話の絵本づくり」を通して、

国語を中心にした創作活動、「創作民話絵本づくり」を通してふるさとに生き続けた人の心の豊かさを追求する。絵本の中に表わす活動を通して自己の人間的価値を問い直していく過程を通して子どもの生きる力の育成をする。

具体的な方法を、国語という単一教科ではなく、国語を軸に教科を総合的にとらえ直し、子どもが、自らの手で表現方法をさぐり出し、表現することができる指導過程を構想し実践する。

(3) 創作民話絵本づくりにかける願い

○ 創作民話絵本づくりは、教科を関連づけて追求する表現活動である。学んだ全てを生かし、ふるさと生きぬいて人の心を求めていく。

子どもは、表現の追求過程で、鳥川の自然や自然が育てた人や生きものに学び、自己の人間としての価値を高めていく。ここに絵本づくりにかける願いと生きる力を育む実践としたい。

○ 創作民話絵本づくりは、創作の民話と創作絵本から成り立つが、両方が一体となった新しい創造の世界である。絵が文のイメージを、文は絵では表現しにくい時間的変化や空間的移り変わり、会話の内容の表現が可能である。

絵も文も、かき過ぎは、相手の想像の世界の領域を犯す。読むことからの、想像の世界で遊ぶ夢が失せ、作者の考えを一方向的に押しつける。むずかしい活動だが、やりとげた時の喜びは大きいし子どもの生き方にも必ずプラスになる。

○ 自らつくり出す活動は、想像と創造のぶつかり合う場であり、自分の思考を育て、創造することへの刺激を与え、新しい構成力や表現力を見つけて養っていく。絵本そのものが子どもの生きる力の表現の証である。

○ 創作民話絵本手づくりの表現過程は、遊びの場でもある。絵本をつくる世界で遊べるという場を得ることは、心のゆとりを持つことにつながる。このゆとりこそ、子どもが本来持っている想像や空想の場を耕す機会を与え、自己表現を高める場になりひいては生きる力と重なる。

○ 創作民話絵本づくりは、世界にたった一冊しかない絵本である。自分の手でつくり出すことだけでも楽しいが、自分がつくった創作民話の絵本を、子や孫まで伝えて行く夢は大きい。

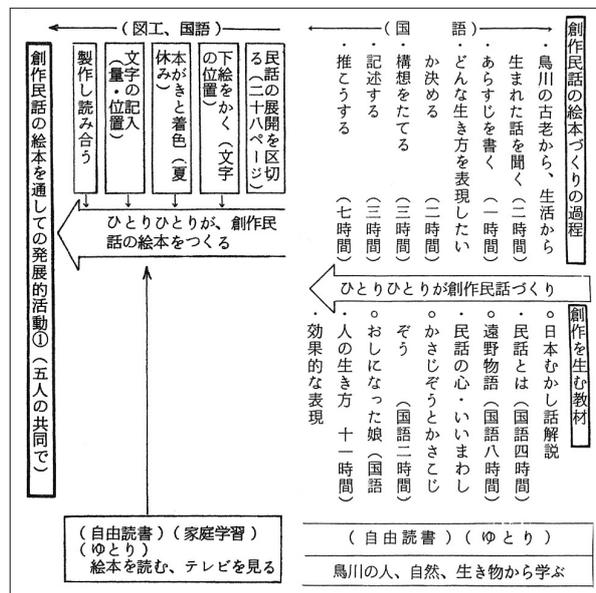
○ 創作民話絵本づくりは、民話のかき方や絵のかき方を教え創作する活動ではなく、読書を通して学びながら創作表現活動としたい。自己の心の中にある、人としての生き方のイメージづくり目的にした読みの活動、それを、自らの手で絵や文字に表現する方法を、読みを通して学ぶ場を設定すれば、自然に自分から読書する。創作民話絵本づくりの表現活動を通して、自分の生活を自分で切り開いていく。

○ 子どもには、得手不得手がある。文をかくのが得意な子は文から、絵の得意な子は絵から取り組むがいい。自分が手さぐりで取り組んで

いくうちに新しい発想を生むであろう。

○ 著者の学級は、6名という少人数学級である。自由に歩かせても全員に目が届く。このことを生かして制作にあたらせた。

(4) 創作民話絵本づくりの構想



3 実践

子どもが、鳥川の人々の生活から、生き方を見つけて創作活動は経験によってちがうが、ここでは、Y子(6年)の足どりを追っていく。創作する追求の記録の累積から分析しやすかったためである。が多く残っていたためである。

(1) 民話分からないというY女

「先生、今年も絶対絵本づくりやってよ。」と、Aが筆者に言った。この話がY女に聞こえた。Y女は、「やだなあ。筆者、まだ、民話分からないもん。」と言った。Aは、「どうしてえ、あんた。前年あんないい本つくったじゃん。そいで、東京まで行って表彰されたじゃん。みんなの中で、一番いい賞もらったじゃん。あいでもあかんのかあ。」「ううん、あやあねえ、絵本としちゃいいかも知れんけど、筆者、民話の絵本ができんくて、あの本にかえただよ。」「先生の言う絵本はねえ、鳥川の創作民話という絵本でなくちゃいかんだよ。筆者のはねえ『筆者がこうなるといいな』という、願いや夢だけだもん。」「ふうん民話ちゃんだあ。」

子ども一人ひとりが、鳥川を見つめ、生きることの深さと喜びをとらえて表現する追求力の

深まりは、その子の育ちや生活経験の違いによって大きく左右される。同じ創作民話絵本づくりという教材を扱っても、育ちや経験の違いによって教材へのこだわりにも違いが生じる。

前年も同じ実践を行ったが大きな差があった。中でも筆者へ教材への見直しを迫ったのは上記Y女（6年）とA（5年）の会話であった。

前年も、創作民話の絵本作りは、次の3つ視点を提示した。ア 民話の中には、どんな生き方があるか読みを通して学ぶ。イ 民話と鳥川の人と共通した生き方を探る。ウ アとイに共通する生き方を軸に、自分を重ね自分の生きることへの願いを持つ。等を通して、民話の内にある生き方と共通したものはないかを探る。

著者は、古老の人9名が語る生活体験の思い出（村人から取材）等を通して、民話の内と共通したものはないかを探らせ、その子の生きることへの願いを創作民話絵本に表現させた。

Y女は、自分の祖母が「鳥川から外へ出ていくことは、たいへんだったが、外へ出てみたいという気持ちを持っていた。そのことを『国府市（国府で行われる市）』の話として語ってくれた」ことを素材にして、創作民話絵本の創作を試みたが、民話の理解不足で、創作を断念した。

筆者は、Y女自身が鋭く追求できる教材として、「自己に内在する生き方のみに着目した創作絵本づくり』に方向転換を提案した結果、「のんびりととんびり」の作品ができあがった。できた作品全部（6年3点、5年3点）を、全国学校図書館主催の「全国手づくり絵本コンテストに」出品したところ、全員入賞であった。とりわけ、Y女の創作「のんびりととんびり」は、全国でも高い評価を得た。作品の中で、Y女は自分の日ごろの生活の中にある、Y女らしい素朴な願いから生み出し生き方を、絵本に表現した。創作した絵本の概略は下記のとおりである。

筆者の組には、S君というたった一人の男の子がいる。女であるUちゃんや私は、これまで何をやってもS君には勝てなかった。これだけならしかたないけど、S君は、私たちに、たずらばかりして喜んでいるので、くやしくてたまらない。だけど、S君がいないと私たちだけでは、できないことが多い。でも、一度だけでいいから、S君をやっつけたいと思って、絵本の中でやっつけることにした。

Y女は、これまでの生活体験から生まれた自

己に内在する不満の絵本をかこうとした。S男にとってはたいしたことではない内容だが、Y女にはこだわりが大きかった。それゆえ、Y女の絵本づくりの追求は、熱中して対象に打ち込めた。完成作品「のんびりととんびり」は、以前には新しい創作をしていった。

生き方への願望も、S男をたぬきに想定しY女やU子が追い回す方法や、穴の中に逃げ込んだたぬきを、1年でも3年でも、入口で出てくるまで待っている。絵や文には、殺したり非常な仕打ちをする場面は見あたらない、Y女の人間味が表出されている作品となった。

表現性の面でも、今までY女に内在する民話の既成概念を打ち砕き、新しい表現の方法を生み出していった。Y女の作品づくりを通して得た表現力の深まりは、彼女の生活への自信を与え、生きる力の育成に大きな影響を与えた。それは、過去には、一つの作品をつくれれば作品の完成が追求の終わる時であったが、冒頭のAとの会話から現在も続いていることうかがえる。

(2) Y女のこだわりをふまえた教材づくり

前年度の教材開発の視点は、複式をふまえた上で、一人ひとりに合った教材をつくる。複式学級は、2学年一組である。教材も、2学年の教科書教材を組み合わせると2年間で消化するところにおいた。（左の表は前年のもの）子どもに合った教材と追求を生む構想したが、5年生になって間もない子に、教科書にあるからといって、6年生でもむずかしい教材を取り入れた教師主導型の教材づくりであった。

Y女は、6年下巻の教科書教材「遠野物語」「柳田国男日本むかし話解説」（5年、動物の能力と振り替え）からは、民話の中にある生き方が理解できず自分の祖母に求めて、絵本づくりを試みたが、方向転換していった。

前年の反省から、新たな教材開発への視点が変わってきた。それは、Y女の「まだ、民話がわからない」という発言が起因している。Y女の「民話がわかりたい」とAの「絵本づくりがしたい」を軸に教材づくりを進めた結果「松谷みよ子民話絵本あとがき」の提示をした。

(3) Y女のこだわりを解くために

ア 「民話絵本あとがき」を、使う前に

筆者の「絵本づくり」の構想は、次のとおりである。(ア)今までの民話のとらえ→・前年つくった絵本のあとがきづくり、(イ)民話とは何かを学ぶ→・松谷みよ子「民話絵本あとがき」(ウ)民話と絵本のかかわり→・いわさきらひろ「童画と私」(エ)民話についてのまとめを書く→松谷みよ子さんへ手紙を書く。

一般的に、絵本づくりの学習は、絵本制作後「あとがき」を書く。教材文を読ませる場合は、本文を読ませるが、筆者は、「絵本のあとがきづくり」から入った。子どもの体験は、書かれたものを読んで学ぶ受け手の側であったが、自分も絵本の制作者として読むのである。作者が、どういう願いを持って、絵本を書いたかという作者側に立った読みをさせるためである。

新しい複式学級には2名が加わったが、過去に絵本づくりの体験があるため絵本のあとがき作りから始めようとする見通しが立ち実践した。

Y女は、「のんびりととんびり」のあとがきを書いた。それを読んで、ずれを感じた。自己の内にある願いを表現することのみを追求してきたと思っていた。しかし、自分ながらに民話というものがわかりかけてきた今、もう一度自分の絵本づくりをふり返ってみると、以前とは違う視点で自分の絵本をかいていたんだという発見ができた。Y女が書いたあとがきをまとめる。

私が、「のんびりととんびり」という絵本に書きたかったことは、とり川にのんびりした人がいない。怒らないでのんびりした生活がしたい。ことであった。下書きは苦勞したが、色塗りは楽しかった。

Y女の「民話がわかりたい」という、ひたむきに問い続ける姿は、自身の手で解らなさを解きほぐし、次の教材「松谷みよ子民話絵本あとがき」の読みの活動を、より強いものにしていった。筆者が外から与えたのではなく、Y女自身が、民話というものにこだわりを持ち、わかろうとし続けた結果生まれたものである。

イ 民話を身近に感じ始めたY女

「松谷みよ子民話絵本あとがき」は、大人向けに書かれているため、難語句の指導をした。その後、初発の発問をして授業を始めた。

T 今から、あとがきを読んでもらうのだけれど、どういうめあてを持って読んでいくか考えた？

Y女 あとがきは、どういうものかをわからすこと

と、すぐ絵づくりをやるのでその時のあとがきの参考に。めあては、この人のかいたあとがきの中に、自分の前書いたあとがきでできなかったことなど、つくりの参考にしたい。

S男 かいた本を、どんな気持ちでかいたか。

M男 この本のあらすじみたいなのがいてあるか。

A男 どういうふうにして本を書いていったか。

筆者の初発の発問に対して、子どものこだわりは、一人ひとりみな違いが「絵本づくり」と「あとがきづくり」という体験が、子どもの足場を強くしている。

この教材は、民話について何も知らなかった作者が、瀬川柘男に連れられて民話探訪の旅に出ることから始まり、民話のとりこになったこと、民話とはどういうものかが書かれている。

子どもは、その子なりの解釈に従って教材の読み深めをしたが、追求する視点は、一か所に集中した。それは「松谷みよ子民話絵本あとがき」の中には、出てくるが、民話としては出てこない「笠地蔵」という例を出して、松谷が感動したことを述べている文章であった。子どもは、その文章を話題にして自分の読みのめあての見直しを始めた。

「笠地蔵」の例で、作者は、「民話というものは、こういうものなんだ。」という主題にせまる切り込み口にしたが、「笠地蔵」の内容の読み取りにこだわり続けた。しかし、松谷みよ子が読み取ってほしいことは、「民話というものは、自分たちの日々の生活から生まれている。民話というものは、遠いむかしの話ではなく、人々の生活そのものだ。」という、彼女の民話に対するとらえを述べている。筆者は、そこで、彼女の民話観を読み取らせるために、次の発問をした。

T そうすると、松谷みよ子という人は、この本の中に全く出てこない笠地蔵のことを、ポッポッ話してくれたことを書きたかったの。

A ぼくは、ちょっと意見が変わって、松谷みよ子という人は、ごくふつうの人に聞いたら、「ところがある。」群馬の六合村のばあさまが、むかし語りの間にふとつぶやいたことばを耳にしてから、肌身に迫る話になったのである。6人の子どもを生んで6人死んだ。六地蔵様になったから、もう死ぬまいと思っていたのに、また一人死んで、今2人いる。

さりげなく聞いたこのことばが、笠地蔵と重なった時、子どもは、はっとした。そうだったのか、じい

とばあにとって六地藏は単なる石仏ではなくて、いとしいものの姿だったのかということを知り、民話というのは、ぼくたちが知っていた普通の笠地蔵の話ではなく、民話の中には苦しい生活にかかわる話だと思ふ。

その時のことであった。今までみんなの話を静かに聞いていたA男がこの話を松谷みよ子という人に話した人は、笠地蔵に出てくるおばあさんじゃないか。と言い出した。これは一見、とっぴな発言のように思えるがそうではない。A男が岐初に彼女の民話の世界へ迫り出した。

その後、U女、Y女がA男の考えに同調していったのに対して、現実的な生活経験のみにこだわったS男やM男は、時代背景が社会で勉強した江戸時代によく似ていたか、これほど有名な人なら、おばあさんは、テレビに出そうだと言っていたが、しだいに民話というものがわかり始めてきた。そして、授業の終わり近くになって

N男が、「先生、どうしても言いたいことがあるで言わせて。あのねえ、みんなの意見と違って、最後の8段落のところに、『この本の読者が、一つでも民話を身近に感じて下さったらと願わないではられない』と書いてあったので…」

と申しだした。この発言がきっかけとなり、Y女は、松谷みよ子の民話観に、迫っていった。Y女が「民話がわからない」と言ったことは、新しい民話への理解を深める学習を生み出した。

学習を通して、お互いの根拠の上に立って、お互いにかかわり合い、自己の創作民話絵本への追求方向を見出してくれた。

4 絵本作りに向かうY女

子ども一人ひとりには、独特の発想のしかたや、追求のしかたがある。子どもの追求を強くし、太らせていくためには、自らが、追求の仕方を振り返り、厳しく吟味していくことが大切である。筆者は、常に、一人ひとりの追求の考えに沿った教材づくりをする。これらのことはその子なりの力を出し切って取り決めるときと場を常に追求していき子どもが足場を強くし、生活を切りひらいていく力を生む原動力になる。

(1) 鳥川の生き方を追いつけるY女

Y女たちは、松谷みよ子—民話絵本のあとが

き—を「民話というものは、鳥川の人たちの生活そのものの中にある願いや苦しみなんだ。民話というものは、今までも自分の生活の中から、いくらでも生まれ出ている。」という読みをして、鳥川の人々の生き方の手がかりを得た。

Y女は、老人から聞いた話、自分で地区を回って聞きだした話の中からは、自分が問い続け太らせていく生き方の発見ができずに、結局、祖母の話「国府へ行った」ことを追求した。

筆者は、これからの追求の方向を見極める意味で、子どもに松谷美代子への手紙を書かせた。Y女はその後、祖母が子どもだったころの生きることの願いを求め創作をしていった。

自分の下書きと既製の民話本や再話との読み比べをしたが、自分の創作民話は、まだ書かれていないことを知った。ところが、どのように肉づけしてふくらめると、自分の求めている人の生き方が読み手に伝わるか、その表し方はどうしたらよいかの発見はできなかった。

(2) 筆者に、見直しをせまるY女

「松谷みよ子さんへの手紙」という形で書いたY女の文からわかることは、(怖さ)というものを言葉で書き表す表現方法にこだわりを示していた。民話も自分の思いを言葉で書くことを通して表現しようとするに心が向いていた。ここでも、書いたものを読んでもらって、自分の思いを相手に伝えるのが民話と思っていた。

民話は、語り伝えられなければ、民話の存在はなくなる。語り手がいて、聞き手がいて、初めて成り立つものである。語り手は、今まで、その土地に生きることへの素朴な願いを求めて、語り手自身が、民話の心を自分の心とのひびきを求めて、自分自身の内に語るものであろう。

聞き手は、語りの場にはいるが、決して強制されて聞かされるのではない。むしろ聞き手の方が、自然に語り手の心の中に引き込まれ、その語りを自分の心の内にひびかせ、自分の生き方を育てていく。こうして、民話というものは、その土地に生きたあかしとして、伝えてきた。

筆者は、前述のような民話のとらえ方ではなかった。このようなとらえ直しを迫ったのは、Y女の「民話がわからない。」という発言と、次の子どもの発言との出会いがあったからである。U子『先生、私、小さいころ、ふとんの中で、『も

もたろう』や、『おむすびころりん』や、いろいろな話を聞いたけど、おもしろかったよ。あれは、文が簡単だもんわかりやすかった。」

Y子 「うん、あやあねえ、くり返しや覚えやすいこぼが使ってた。そういえば、私、お話の中の人物になりきっていた。」「うんとこわいと思っていても、何が出てくるか、もっと聞きたくなる。」

A男 「ぼく、夢中で追いかけることがある。そういうの、よく覚えとる。」

A男 4年の国語で、ならった松谷みよ子やまなしとり『いけっちゃかさかさ。いくなっちゃかさかさ』の言い方が、すごくおもしろい。まだ、ほかの所にもいろいろおもしろい所がいっぱいあったけど、ここが一番面白かった。」

筆者は勤務校の子どもと職員が全校で取り組んでいる「全校集会や全校読書」などの学習活動と、民話の語りの場と共通したものが多いと重ねて考えた。民話に内在する生きることへの願いやそれを広げていく語り場は、学校生活の場でも見られる。

高学年が、大きい子という意識で、力でもって自己の生き方を無理に押しつけ、従わせていくという人間関係の中では、「全校の子が、力を合わせて自分たちの学校をたくましく鍛えていく。」という追求の場は生まれにくい。むしろ、大きい子が小さい子を包み込み、小さい子も、大きい子も、お互いに心をひびき合わせて追求していくことが、全校読書などの学校集会を強くたくましくしていくと思われる。

(3) こわさの表現を求め続けるY女

Y女は、自分がこだわり続けている「こわさ」の表現を、書き表すために、読書活動を通して学び続けたが、心の内のイメージに合うものは発見できなかった。筆者は、Y女が教えてくれた「民話は、聞き手がいて、語り手がいる場である。」ということヒントに、全校読書で、こわさの問い直しをさせた。

Y女のこだわり続けているこわさの問い直しといっても、その部分だけの見直しをさせても効果は小さい。お話全体が展開する中で、どのように表現していくと、より心の内のイメージに迫るこわさの表現ができるかを探らなくてはいけない。

一般的に言って、上学年の方が文章構成力も

表現力もすぐれており、したがって、下学年から学ばせることは、無駄であると思われがちだが、必ずしもそうではない。下学年には、上学年ではできない「直観的な発想」がある。この発想は、予想外な面白さを生むことがある。

Y女は、自分のつくった民話を、全校児童の前で語った。時々、「さあて、ここから先はどうなると思う。」と、下学年に問いかけて、聞き手側の受け方や発想を手がかりに、自分の追求の方向をさぐり出していった。全校読書の後、今度は、学級でY女の話の話を推こうとした。

M男 こわさを出そうとしたけど、こわいと思った人がおらんで、それを出す工夫をしてほしい。

Y女 娘が、おにごっこしたとこと、道に迷ってしまったところを出したつもりだった。Kちゃん(2年)が、それと、文君(4年がもうちょっと長くしていくと、本当のこわさが出ると思うので変えたい。

S そのへんをふくらますのじゃなくて、国府市のところからふくらませていくといいと思う。娘は、始めて市へ行ったもんで、びくびくしとるだらあ…

U子 いちばんこわいところは、道に迷ったところだもん、そこをふくらませていかんと、お話の中心はなくなっちゃうじゃない。

S男 4年の子に聞いた時、こわい人は2人しかいない。

Y女 いいと思ったけど、わたしが、おばあさんに聞いたことは、道に迷っただ。だもんだから、やっぱり迷ったところから……

S男 どっちがいいかわからん。もうちょっと話があったらわかるよ。

T もうちょっと話があるとは、どういうこと。

S男 Yさんの、おにから逃げて、おばあさんの所まで行った所までし書けていないからこの先がないとどこを膨らめるかがわからん。

M男 おににあったところは、せっかく、おにが出てくるもん、おにごっこじゃこわさがなくなる。おばあさんのところへついたら、このおばあさんが、山んばだったらこわくなるじゃないかなや。

Y女 Y君、この山んばは、こわい人？(Y男正、こわい人じゃないかな)

Y女 それだったら、やめた方がいいと思う。

全校読書の後変わり始めた。

(4) わたしをのりこえていったY女

「こわさがわかりたい」という、ひたむきに問

い続けるY女の姿は、筆者、民話のとらえ直しを迫り、「全校読書」という語りの場を切りひらいていってくれた。この場は、国語の目標である主題や要旨のはっきりした表現をするために、全体の表現を自分の書いた文章を読み返して叙述のしかたについて、いっそう工夫すること工夫することという、大切な内容が含まれていることを教えてくれた。下学年から学ぶという、違う着眼点からの学習は、Y女のこわさの追求を「おにが出て来て、つなひきをする」という浅い読みから深い怖さの追求を生んだ。Y女「萩坂でおばあさんが道に迷ったこわさは、自分が行って実感としてわかるしかない」という、たくましさをも身につけてきた。このことは、今での生活体験では全く考えられない姿であった。

Y女の追求の強さは、母をも動かした。Y女を峠の向こう側のふもとで下し、こちら側で母が待機する設定がなされていたからである。

Y女のたくましい生き方の追求は、夜の萩坂峠の色を求めて、4日間も、夜の空の色と山の色と、心の中のイメージとの共鳴を探った。筆者も刺激され、Y女の願いに応えられる活動を続けたがついにその色の発見の手助けにはならなかった。なぜならY女の求めている表現は、筆者のようなものでは他太刀打ちできないほど高度なものであった。

(5) たくましくなったY女

今日ちりんこのすすという本の山の色を見ていたら、やっと空の色がかけそうになった。空の色をぬっていたら、M君が来た「なんだこや、わけがわからんなあ」と言って通り過ぎた。私はやっぱりこの色じゃ悪いと思いきりの本を見なおした。

今Y女は、本気で絵本作りをしている。色をさがしはじめて、4日になる。自分の生活体験と読書体験、自分の内にある想いの一つが調和して、いい色のひびきができた。今度は、その色を絵の中へ表現するその色を絵の中へ表現する努力を始めて、また30分が過ぎた。そして、ようやく着色し始めた時にM男と出会った。Y女はその日、M男のことを日記に書いた。

筆者は、Y女の日記を読んで、筆者の子どものとらえ方の甘さを反省すると同時に、Y女がたくましく成長している姿を体感した。筆者のとらえているY女の姿は、このような場に出会

うと、黙って何もしなくなるが多かった。

筆者は、Y女の日記を読んで、筆者の子どものとらえ方の甘さを反省すると同時に、Y女がたくましく成長している姿を体感した。筆者のとらえているY女の姿は、このような場に出会すると、黙って何もしない。筆者は、Y女の日記を読んで、わたしの子どものとらえ方の甘さを反省すると同時に、Y女がたくましく成長している姿を体感した。

筆者のとらえているY女の姿は、このような場に出会すると、黙って何もしなくなるが多かった。だから、今日もM男のことを「ともに絵本づくりをしている仲間が、自分とは違う視点で助言してくれた。」と、素直に受け入れて、自分の追求の甘い姿を見直していった。

5 考察

S男、おれはお前らに言っときたいことがいっぱいある。まず、本気でやること。本気でやらんと、なあんもできんぞ。ほいからどんな子もばかにするなよ」「困っとる子は助けてやれ。」(S男)「うんそうだよ、あつくん」(Y女)「筆者も、そう思うな。」(Y子)

これは、さすが卒業式という日のできごとであった。6年のS男が、たった2人の5年に話していた。S男の言葉は、不明瞭だったし、同じ6年生の有子やY女も、元気がなかったが。

このできごとは、担任には、「ごくありふれたこと」としかひびかなかった。しかし、ここには、6年から5年への生き方の伝え合いがあった。心と心のひびきが生まれていたのだった。そのことを教えてくれたのは、卒業式の夜、Y女が書いた日記であった。

卒業式の前日、私は、ねむれなかった。それどころか涙さえ出そうになった。烏川小学校の先生やみんなの顔を一人ずつ思い出しながら「ありがとうございました。」「ありがとう。」「ありがとう。」とお礼のことばを心の中で言った。その中でも、M君とA君の顔を思い出した時、涙が落ちそうになった。その訳は、いつも同じ教室で3年間も勉強して、すごく思い出が深かったからだ。口げんかしたり、なかされたりしたこともあったけど、かえそのほうがいい思い出となった。

M君の思い出は、冬、私が、校舎の裏で寒そうに重い石油を運んでいると、「ぼくが、重い方持ってたげ

る」と、持って行ってくれた。私は、その時、どうやって重いやつを持っていくか困っていてその方がいい思い出となった。たのだ。(略) A君の思い出は…(略) 卒業式は、思い出に残るいろんなことがあったけど、謝恩会ではもっと思い出に残ることがあった。それは、「私のアルバム」(時々心のこった場面を、絵や文で記録したスケッチブック)が読めたことだ。6年間本当に楽しくてそれは、「私のアルバム」が読めたことだ。6年間本当に楽しくて…絵本のことを思い出すと、今でも涙が…

5, 6年複式学級では、卒業するぎりぎりの日までお互いがよりよい生活を求めて、教え合い、競い合い、支え合った。6年生は、今まで自分たちが求めてきた、「6年生としての生きがい」を5年生に伝えていた。5年生の子は、この現実を心にひびかせしっかり受け止めていた。一瞬のこわばりのある表情と、うなずきの表現がそのことを示していた。これこそ、筆者が求め続けた「豊かな自己表現力とおして生きる力を切りひらいていく」の姿とみたい。筆者の願う自己表現とは、決して技巧的、技法的なものではない。「人間としての、その子らしい生き方の表出」である。

(1) 全校の仲間とのひびき合い

筆者は、子どもに生活日記を書かせ教師は学級通信を発行している。また、できるだけ作品として残る表現活動を大切にしてきた。その中から、S男の「6年生としての生きがい」にかかわることをさぐると、次のようであった。

今日は入学式だ。家でも、お店のおばあさんやみんなか、一S君、6年生だからがんばりんよ」と言われる。けれど、ぼくは、孝ちゃんと、ちょっとちがう学校にしていきたい。

Tちゃんは、小さい子の意見を聞かず…

一人ひとりを育てるには、集団の力を強くしていかなければならない。しかし、本校では、全校32人というごく少人数の学級のため集団の力は弱いこの欠点を補うものとして、全校活動を大切にしてきた。生活経験のちがいはあるが、全校の子どもが、精一ぱい自己表現をし、それをひびきあわせることを通して、より強い集団の力を育ててきた。一前年の6年生だったT男は、自分の考えで全校を一つにまとめてきた。

そのため、5年生だったS男は、自分の考えが取り上げられない不満が心に残っており、「みんなの意見を入れて」という生きがいを生み出したのだ。一人ひとりの考えを大切にした全校活動は、筆者にとってもむずかしい仕事である。S男は、自分が6年生として、全校のリーダーとなった時、自分の生きがいの達成に立ち向かった。しかし、自己かっとうが起り悩んだ。そして、自分の悩みを次のように記している。

ぼくは、学級通信を読むまではわからなかったが、前と比べて本気でやれるようになった。今思い出すと、とてもなさけないが一学期のころはひどかった。授業が始まっても遊ぶことが多かった。先生に注意されても、また、次の日遊んでいた。

子どもが生きがいを持ち続けている時は、必ず鋭い自己観察を始めるものである。そこから、自己の認識を深め、新しい自分をつくり出していくものである。そこには、表現しぬいて、自分のものをつくろうとする追求があるつくり出していくものである。そこには、自らをきびしくし、考えぬき、表現しぬいて、自分のものをつくろうとする追求がある。この自己表現の過程では、自分を求め続けるきびしさがある。また、そこに新しい発見が厳しく要求される。そんなことが続いたある日、絵本作りが始まった。

6月の雨の日のことだった、4年生のH男が、用事があってぼくたちの教室へはいつか来たときのことだ。先生が「お前はS男より頭がいいぞ。」と言われた。ぼくは、はじめじょうだんかと思って、いったら、先生がすごい勢いでおこったので、きっと言葉の中に何か意味があるぞと思って、H男を見続けた。

H男を見続けていると、何をやるにも本気で頑張っていることに気がついた。遊んで負けそうな時も、最後までがんばっている。(略) 授業は、全校読書しかみたことはないが、みんながつまらながっている時でも、一人でがんばっている。「先生の言うのはこれだ。」と思った。それがわかったのは、十月ごろであった。それからはどんなことでも本気でがんばった。何でもできるようになってからも、本気でがんばった。そしたら、何でもできるようになった。こうして、ぼくが変わることができたのは、H男がおったからだ。

(略) もう一つ、ぼくを変えてくれたのは絵本づくり

だ。絵本づくりをやっていたから、先生の言ったことを考えることができたのだと思う。絵本は、文章も絵も、人の心のことをかく。つくったものが、読んだ人にわからなければいけない短絵本は、人の心を考えるふしぎな力を持っている。

ぼくは、もうじき卒業してしまうが、その前にやりたいことがある。それは、H男は、自分のことだけに真剣だが、ぼくは6年生だ。来年は、NやAが6年生になる。今は、気づかないと思うがきっと6年生になると、本気でやらない子がいて、ぼくみたいに困る。だから、今のうちにできるだけたくさんの子を本気にしたい。今ぼくがやりたいのは、H男子だ。

上記の記録を読むと、はじめに持った生きがいをつらぬき通しただけでなく、自分自身をきびしく見つめ、問題を一つ一つ解決し、求め得た喜びの表現が記されている。

一般的に言って、大きい子の方が生活力も行動力もあり、下学年の子からは学ぶことはないと思いがちである。S男も、小さい子の意見を取り入れてといいながら、H男からは学ぶことはないと思っていたのであろう。その結果「うそだらあ」という、おどろきのことばが生まれたのである。しかし、自分の生きがいは大切に持ち続けていた。その結果として、今まで聞こえなかった教師のことばがこえ出し、今まで見えなかったH男の行動が見えてきたのだ。

S男は「6年生としての生き方の追求」をしただけでなく、これからのことを考え、「みんながひびき合える学校にしていきたい」という、より大きな人としての生き方を発見し、それが卒業式の前日まで続いた。

(2) 創作民話の絵本づくりは生活の中で生きる力を育てた

筆者は、「子どもの心に感動を生む授業」を合いことばに教材の開発をしてきた。そこには、筆者たちが従来行ってきた、教科書を中心に内容を教え込む授業、または、子どもの断片的な発言をより合わせて、教師の授業構想にしたがってつなげていくという教え込みや強制はない。教材とのふれ合いや教材を通して、子どもと教師の心のひびきが続く中で、子ども自身を今までと違った新しい世界に引き込んでいくことができた時本当の意味での感動が生まれる。

筆者は、子どものみずみずしい感動を練り上げながら、自分の生活にひびくものを呼び込み、全身で表現の追求ができる価値ある教材の開発に取り組んできた。S男とY女の記録を読むと、自分たちの生活や生きがいを方向づける核になったものとして、「国語科における書く表現活動」の研究のため開発した「絵本づくりの教材」をあげている。

具体的な文章で言うと、Y女は「卒業式には……謝恩会ではもっといい思い出があった。それは『わたしのアルバム』が読めたことだ。中でも、この6年間、本当に楽しくて思い出に残る『絵本』を発表したことだ。『絵本』のことは、今でも思い出すと涙が……」と述べている。

S男は、「ぼくの心を変えてくれたのは『絵本づくり』だ。『絵本』をやったからは、人の心が見えるようになった。絵本は人の心を考えるふしぎな力を持っている」と述べているS男がH男に着目し、自分を変えていくことができたのは、開発した教材を通して育ったものと、全校の中で育ったものが深くかかわり合っていたことがわかる。国語科の枠をのり越え、今までの生き方を、今までの全体験を総動員し、それらを通して最高の表現が生活を変え、こどもの生きるちからの育成にかかわっていったと思われる。

参考文献

- ・黒柳 論「おにっことむすめっ子」絵本（自費）2010
- ・文部科学省「小学校指導要領解説―総則編」2008
- ・文部科学省「小学校指導要領」2008
- ・寺西和子「総合的学習の理論とカリキュラムづくり」（明治図書）2000
- ・堀川小学校「生き方が育つ授業上巻」（明治図書）1984
- ・堀川小学校「生き方が育つ授業下巻」（明治図書）1984
- ・瀬川栄士「国語科授業の開発」（明治図書）1984
- ・鳥川小学校「へき地教育研究報告10号」1985
- ・鳥川小学校「へき地教育研究報告11号」1986
- ・堀川小学校「自立性の開発」（明治図書）1978
- ・堀川小学校「授業の開発」（明治図書）1968

